

スポーツサイエンスが拓く未来

新時代に実践的な学びを
スポーツ科学部誕生

大阪体育大学では4月1日、体育学部が組織改正され、スポーツ科学部が誕生した。3月23日にはスポーツ科学部開設記念シンポジウム「スポーツサイエンスが拓く未来」が開催され、3大会連続の五輪出場を決めたバスケットボール女子日本代表の恩塚亨ヘッドコーチらが講演した。

大体大は、東京五輪翌年の1996年、西日本初の体育大学として開学。日本を代表する「スポーツの総合大学」の一つであり、各界に多彩な人材を輩出してきた。現在、社会がスポーツに対して期待する領域は拡大を続け、データベース、エビデンスベースに基づく分析力、課題解決能力などが求められている。新たな時代の要請に対応するため、より科学的な視点で幅広く実践的にスポーツの学びを深めることができるスポーツ科学部を誕生させた。

アスレティックトレーニング、健康科学の6コースを備える。この6分野すべてをカバーする大学は全国でもまれだ。専攻コースとは別の専門科目を履修できる全国でも珍しい「副専攻」も導入し、「スポーツ心理に詳しい保健体育科教員・ビジネスパーソン」など幅広い知見を備えた人材を養成する。

ハイパフォーマンスの展開
社会との架け橋に

シンポジウムは各大学や本学の教職員、学生、高校生ら約300人が参加した。

基調講演は、ハイパフォーマンススポーツセンター(HPSC)長・国立スポーツ科学センター(JISS)所長の久木留(くきどめ)毅さんが「ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ」のテーマで務めた。久木留さんは「大阪体育大学とは連携協定を結び、多数の卒業生がJISSで働くなど関係が深い。私たちがハイパフォーマンス領域で培った知見を地域の小中学校などに展開する際、大体大が仲介となること

ともあり得る」などと本学に期待を寄せた。

続いて、恩塚ヘッドコーチが「バスケットボールコーチの視点から」のテーマで記念講演。「ゲーム分析を徹底し、日本の強みを『アシリティ(敏捷性)』と定めて戦ったことが、五輪出場につながった。データを行動決定に活かすためには情報をストリーでつなげ、目的から逆算した台本を作り、選手が共有することが重要」などと語った。

パネルディスカッションでは、三島隆章スポーツ科学部長がコーディネーターを務めて、スポーツ科学について様々な意見が交わされ、活発な質疑応答が繰り返された。



神崎 浩 副学長
開会あいさつ

原田 宗彦 学長
開会あいさつ



三島 隆章 学部長
大阪体育大学
スポーツ科学部

恩塚 亨氏
バスケットボール女子
日本代表ヘッドコーチ

久木留 毅氏
ハイパフォーマンス
スポーツセンター長・
国立スポーツ科学センター所長



当日のレポートと講演全文
<https://www.ouhs.jp/news/2024-03-25-33533/>